

U J N R 水産増養殖専門部会

第16回 日米合同会議共同声明

1987年10月20日-21日

第16回 UJNR 水産増養殖専門部会・日米合同会議は1987年10月20,21日両日、南カロライナ州、チャールストンの Marine Resources Institute において開催された。シンポジウムの課題は「水産増養殖における遺伝、育種学研究」であった。

能勢日本部会長とMahnken 米国部会長よりそれぞれ開会の辞および歓迎の辞が述べられ、両国の部会長から委員、来賓およびオブザーバーが紹介された。（別紙 1, 2）

I . 事務会議

事務会議は、和田日本事務局長とMcVey 米国副部会長との司会で行われた。会議の書記には 中西 委員とFox 委員が選出された。以下の事柄が事務会議で討議された。（別紙 3）

1 . 研究者の交流

UJNR を通じての研究者の交流は過去一年間、以下のごとく行われた。

1) 農林水産技術会議事務局の松里寿彦氏は1987年3月、魚病のコントロールシステム研究の為にワシントン州の Northwest & Alaska Fisheries Center及び西バージニア州の National Fish Health Research Laboratoryを訪問した。

2) 水産庁研究課の堀尾保之氏は1987年3月、魚病のコントロールシステム研究の為に、ワシントン州の Northwest & Alaska Fisheries Center及び西バージニア州の National Fish Health Research Laboratoryを訪問した。

3) カリフォルニア大学のChristopher Toole 研究員は1987年3月から4月まで、水産振興計画立案に際して参考にする為に、神奈川国際水産訓練センター、北海道さけます孵化場、東北区水産研究所及び養殖研究所を訪問した。

4) 養殖研究所の本城凡夫研究員は1987年9月から11月まで、植物プランクトンの免疫反応に関する研究の為に、シアトルのワシントン州立大学及び NMFS の Northwest & Alaska Fisheries Centerにおいて共同研究を行うとともに、チャールストンの Wildlife and

Marine Resources Department, フロリダの Marine Research Laboratory 等を訪問した。

5) 養殖研究所の中西照幸研究員は1987年10月から11月まで、免疫遺伝学研究の為、チャールストンの Wildlife and Marine Resources Department、西バージニア州の National Fish Health Research Laboratory、カリフォルニア州 UCLA 及びワシントン州の Northwest & Alaska Fisheries Centerを訪問した。

6) 養殖研究所の小野里坦研究員は1987年10月、染色体工学研究の為、チャールストンの Wildlife and Marine Resources Department、フロリダの Marine Research Laboratory及びテキサス州 Marine Biomedical Institute 等を訪問した。

7) 長崎大学の夏刈豊助教授は1987年3月から1988年1月まで、イカの分類及び遺伝学研究の為に、テキサス州 Marine Biomedical Institute、サウスカロライナ州 University of South Carolina 等において共同研究を行っている。

2. 文献の交換

今年度米国部会より160編の論文およびそのリストが送付された。日本部会からは67編の論文とそのリストおよび1986年度漁業白書の英語版10部が送付された。

3. 共同研究

1) 水産生物の移殖および導入

Sindermann 博士により作成されたガイドラインの草稿が日本側担当者の鈴木博士に送付された。鈴木博士の意見を取り入れた最終案が双方のメンバーにおいて現在検討中である。なお、これは単なるガイドラインであり、いかなる規制もなく、政策にも影響を及ぼさないものとする。

2) 海産魚介類の疾病の標本目録の作成 (ROMP)

目録作成の途中で松里博士が技術会議事務局に移られた。しかし、この間に大きな進展がみられ、疾病標本目録やスライドは完成したので、この課題は完了とみなす。

3) 海産養殖種の病気の索引の作成

索引は標本目録の作成と関連しており、世界の養殖種の疾病 (World Aquaculture diseases) という本の刊行という形で、索引や目録も取り入れた新規課題として推進する。Sindermann博士がこの件に関する詳細について日本側部会長に通知する。

McVey博士が Wildman博士に代って研究者の交流を担当することになった。東海区水産研究所生化学研究室長芦田勝朗がワシントン大学 Dr. Catterallの所で海産動物の神経薬理的活性物質について、また養殖研究所繁殖技術研究室長広瀬慶二がハワイ海洋研究所 Dr. Leeの所で魚類の産卵誘発用徐放性ホルモン製剤の開発について、1987年度内に共同研究のために派遣したいとの日本側の提案が了承された。

4. 出版物の刊行

Sindermann氏は第13回のプロシーディングを以て、UJNRの編集担当としての任務を完了し、その後を Albert Sparks氏が引継ぐこととなった。第12回日米合同会議(1983)のプロシーディングは既に刊行された。第13回日米合同会議(1984)のプロシーディングは明年刊行される予定である。第14回日米合同会議(1985)のプロシーディングは編集が終了し、第15回日米合同会議(1986)のプロシーディングは現在編集中である。論文の提出期限や体裁についての取決めがなされた後、両国部会長は旧編集長に対し謝意を表明すると共に新編集長への協力を約した。

5. その他の事項

- 1) MRECC憲章：米国部会長によって作成されたドラフトは双方のメンバーの検討に附されることで合意された。日本側はこのドラフトに検討を加え、意見を添付し、1988年1月末までに米国部会長へ返答する。
- 2) 第20回国際養殖会議：合同会議の可能性が検討されたが、決定はなされなかった。
- 3) 日本側部会長より、日本政府は国際共同研究を活発に展開する意向であり、UJNR水産増養殖部会においてもその可能性を模索して行きたい旨の提案がなされた。なお、このプロジェクトは水産学にとどまらず、医学や農学等幅広い内容におよぶべきだとの考えが示された。

6. 次期合同会議の計画

次期合同会議のシンポジウムの課題は”マリーンランチング”に変更することが日本側より提案され了承された。この背景について、日本側部会長より、1988年は大型別枠研究”マリーンランチング”の最終年度に当たることでもあり、その成果を米国側にも正しく評価してほしい旨の説明がなされた。シンポジウムのトピックスはサケ、マスをふくめた

病気、栄養、遺伝、生理等幅広い内容を含むことで合意された。

第17回合同会議の事務会議およびシンポジウムは養殖研究所の近くの伊勢市において開催される予定である。現地検討会議は東北、北海道の研究所および養殖場を視察することが計画されている。

7. 現地検討会議

現地検討会議のスケジュールについてWaddell Center の Manzi博士より説明があった。

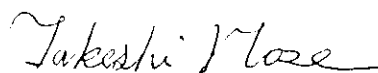
II. シンポジウム

メインシンポジウムはチャールストンにおいて、またサテライトシンポジウムはサウスフロリダ大学において開催された。メインシンポジウムにおいては19の研究発表があり、サテライトシンポジウムにおいて6つの研究発表がなされた。口演題目は別紙4および5に記載されている。

今回のシンポジウムおよび現地検討会議の開催にあたって尽力されたManzi 博士にたいして両国部会長から謝意が表明された。

チャールストン、南カロライナ州

1987年10月20-21日



能勢健嗣
日本部会長



コンラッド マンケン
米国部会長